

## 第 二 回 九 州 戯 曲 賞 最 終 審 査 過 程

九州地域演劇協議会まとめ

### ■ 最終審査日時等

平成22年7月18日（日） 大野城まどかぴあ

### ■最終審査候補作品（5作品）

島田佳代（鹿児島県伊佐市）	「闇に朱、あるいは蛍」
高場光春（福岡県久留米市）	「先生とチュウ」
高橋克昌（福岡県福岡市）	「踊り場にて、」
河野ミチユキ（熊本県熊本市）	「義務ナジウム」
川口大樹（福岡県糟屋郡志免町）	「ボスがイエスマン」

### ■最終審査員

中島かずき、古城十忍、横内謙介、松田正隆、岩崎正裕

### ■審査結果

大賞 該当なし

佳作 河野ミチユキ（熊本県熊本市） 「義務ナジウム」

### ■審査方針等

- ・大賞が出た場合、原則として他の賞は出さない
- ・大賞の水準に達しない場合は、大賞なしも可。
- ・大賞がない場合、佳作等の賞を出すことが出来る

## ■ 審査過程

各作品について、審査員からの講評をおこなう

### 「闇に朱、あるいは蛍」

鹿児島。霊園で働く男とその母の住む家にて話が進む。ある日2ヶ月前に妻と死別した健がこの家にやってきて過去の思い出に波紋を広げるというストーリー。

手馴れてる感がある。人物相関図を含めよく書かれている。善良な人間性が書かれていて好ましいという意見が出る。一方、夏生に共感できない。ステレオタイプな叙情になり最後が脹らみきれずに終わってしまったという講評が寄せられた。

### 「先生とチュウ」

とある高校の生物教官室を舞台に、採用試験を控えた非常勤講師の浅野と日程を間違っ  
三者面談にきた母娘を中心に展開する作品。

登場人物女性3人に共感が持てる。短い時間に関係を見せて母と子の密な関係を見直す瞬間にかけており、その手腕はアマの域を越えているという感想があがる。また、ねずみと浅野先生が重ならない。畑澤氏のような高校演劇戯曲もある中、高校演劇という枠の中に自主規制して納まっているのがもったいないという指摘があがる。

### 「踊り場にて、」

抽象的な踊り場のような場所。その場所から行こうとする人、行けない人。やがてこの場所に集まる人達の背景が明らかになっていく。

途中までは面白かった。どこかわからないままで終われば面白かったという意見が寄せられる。他方、具体的に抱えているものの重さが見えない。登場人物たちが個々に集まっていることに説得力がない。掴み所を見つけにくい作品という評価が出る。

### 「義務ナジウム」

現代の価値観から離れた伝統を受け継いでいく人々。まちおこしのスポーツ事業やトンネルの開通など、あらたに町にはいってくる人との伝統の間に起こる葛藤を描いた作品。

書き手としてやられたという感じ。村の閉ざされた性が描かれていると思う。という見方が表明される。一方、現代の『檜山節考』になり得る一步前で破綻してしまったのではないか。女性たちが伝統に対してなぜ従順なのか疑問。という講評が寄せられる。

### 「ボスがイエスマン」

地方都市にあるタレント事務所。独立を目論む若いタレントたちが集まってくるが、新たなリーダーはいつまで待ってもやっこない。

ワンシチュエーションコメディというところにすごく格闘した後があり好感持てる。目の前の観客と格闘しており非常に大事なこと。という感想がでる。一方、瑣末なことで終わっている。作品の先に大きなものを見たい。という評価がある。

(休憩)

一人持ち票 1 票で 1 回目の投票

「闇に朱、あるいは蛍」 2 票

「先生とチュウ」 1 票

「義務ナジウム」 2 票

投票結果を受けて討議を行う。

いずれの作品も大賞として推す有力な意見はなく、複数の佳作授賞も視野に入れてさらに討議を重ねる。最終的に「義務ナジウム」 1 本の佳作授賞にて審査員の意見一致を見て審査会を終了した。